

一休禪師頓智奇談
目次

◎ 風に任してじや……………	1
◎ さア施行じやく……………	6
◎ 春の屁は面白い……………	13
◎ 横槌はあるか……………	16
◎ 化物は宙にブラリ……………	21
◎ コツンは何うなります……………	26
◎ 成仏とは屁のようなもの……………	29
◎ 乃公の大切な品……………	35
◎ 心の内に眼がある……………	40
◎ 不思議を御覧に入れる……………	45
◎ 年をとるとなア……………	51
◎ 万事引き受けた……………	57
◎ 之れは乃公の大好物……………	64
◎ 頭の按摩はコリく……………	71

- ◎地蔵尊が風邪をひいておる……………77
- ◎天眼通を御覧に入れる……………82
- ◎猫背じゃ無い肥えてるのじゃ……………88
- ◎黄金の棒よりも針……………94
- ◎乞食坊主に用は無……………100
- ◎暴漢は此の門番……………107
- ◎此の御出家を誰れと思う……………111
- ◎此の処小便無用……………117
- ◎お前の云う事が判らぬ……………124
- ◎アンナ無茶な引導……………127
- ◎是れなればよからう……………133
- ◎一つの舞が七十日……………136
- ◎此んな詩が何処にある……………145
- ◎弘法大師も野原の土……………149

◎ 御罰 <small>おばつ</small> が当 <small>あた</small> るぞ……………	152
◎ お前 <small>まえ</small> 様 <small>さま</small> は豪 <small>えら</small> い出 <small>しゅ</small> 家 <small>つけ</small> か……………	161
◎ 是 <small>こ</small> れは矢 <small>や</small> ッ張 <small>ば</small> り詩 <small>し</small> ですか……………	167
◎ 粥 <small>かゆ</small> の字 <small>じ</small> は何 <small>ど</small> うして……………	174
◎ 金 <small>きん</small> はシ <small>ん</small> では身 <small>み</small> につかぬ……………	178
◎ 何 <small>な</small> んたる無 <small>ぶ</small> 礼 <small>れい</small> 者……………	180
◎ 馬 <small>ば</small> 鹿 <small>か</small> も馬 <small>ば</small> 鹿 <small>か</small> も大 <small>お</small> 馬 <small>お</small> 鹿 <small>ば</small> だ……………	184
◎ 蛸 <small>たこ</small> じや……………	190
◎ 見 <small>み</small> て恐 <small>おそ</small> ろしき地 <small>じ</small> 獄 <small>ごく</small> かな……………	198
立川文庫について……………	205
解説 加来耕三……………	207

一 休禪師頓智奇談

◎ 風に任してじや

九重の雲深き竹の園生の御身を捨て、僅か七歳の時から出家得道せられて茲に三十余年、磨きに練いた難行苦行は性来の目から鼻へ抜ける聡明の氣と相優つて益々光を添え、天ツ晴名僧智識となられた小僧の宗純は、恩師華叟禪師入滅の後、其眼鑑によつて都の名刹、紫野の大徳寺を譲られ、名も一休禪師と名けられることゝなつた。

是れが為めさらでも響きわたつた宗純の名は洛中洛外は元より近畿地方の信徒不信徒に伝えられ、「ヤレ生仏様を拜みたい」「大徳寺の今度の和尚様は中々豪い御人だから一生の内一度は是非に拜まねばなるまい」と云う風に大徳寺の名は禪師の名によつていよく高く日々参詣をするもの引きも切らぬ有様。

けれども、兎角世の中は三分五厘、笑うも一生泣くも一生、米の飯は何うせ糞となるもの、糞は米の肥料となるもの、人間は貴いも賤しいも死ねば同じ土になるものと大悟徹底せられた禪師は少しも得意の色も無い。来るものは味噌も糞も一緒、貴人高家も屁とも思

られましたので、ツイ何心なく……」「コレく、斯様の事は自分の心を現わすものじゃ。然らば今一応尋ねる。風吹かば如何」「ハッ……」「出家得道如何」「ハッ……栄華必滅会者定離、三界に家なきは出家の身にござります」「フム、然らば風吹けば如何」「ハッ……只だ風に任すより仕方ございませぬ」「善哉く、用意をせい」「ハッ、何と仰せられます」「ハ、ハ、ハ、ハ、其方はまだ得道をせぬと見えるの。是れを見よ」と傍らの硯を取り出して料紙に認めたのは、

此の庵は清き住居と思いにしに

浮世の風は免れざりけり

「道意、何うじゃ、此の意味は判ったか」「ハッ……」「乃公は浮世の風は嫌いじゃ。此処も此節は大分風が吹く。暫らく収まるまでは何辺にか免れようノ」「夫れでは御師匠様に……」「其方は伴をせい。誰れにも秘しておくがよかろう」「ハッ……」「用意をせい、判ったか」「では只今から」「元よりのこと、出家は三界に家なし。風吹かば行け、吹かずば止め真帆片帆、浪に任して風に任してじゃ」「ハッ、畏まりました」

道意は庫裡の方へ馳せ去ったが暫らくすると、足には脚絆掛け、首には頭陀袋、手には

網代笠さえ携げて「お師匠様大きに遅くなりました」と出て来たが、禪師はと見ると相変らず其儘座つて居られる。「お師匠様、夫れでは御供を致しまする」「フム、ではボツく出掛けよう」「ですが御師匠様、貴方の御用意は……」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、出家は三界に家無しじゃ。人間は生れる時にも裸身なれば十万億土の旅も裸身じゃ。まして暫しの間の旅に用意なぞは要るか。其方に用意と申したのは弥陀の御前に暫しの御別れをするように申したのである。全体其風体は何んじゃ」「恐れ入ります。夫れでは是れを置いて参りましょう」「ア、待て、待て、其まゝでもよい。其袋の中へ餅なりとも入れて行け。途中喰べるのに丁度よかろう、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、」

禪師には道意を伴れて其まゝ大徳寺を飄然と立ち去られたが、夥多の寺僧は気がつかなんだ。が其夕である。一人の寺僧が慌たゞしげに同僚に向つて「ヤツ、お師匠様が、御留守じゃ。何処へ御越しになられたのだらう。黙念さん貴方お師匠様知りませんか」と云うと、其同僚は怪訝な顔付き。「エツ、お師匠さん、そんなことがあるものか。お師匠様は今日は何処へも御越しになられぬ筈じゃ」「でも御部屋にも御在になられず本堂にも御在じゃない」「夫れでは御庭へ御越しになつたのであらう」「インヤ、最前から彼方此方

お探し申しあげたが何処にも御姿が見えんぜ」「そんなことがあるものか。夫れでは平助さんに聞けば判るであろう」「違い無い。では一応聞て見よう」と、寺男の部屋へ走つて「平助さん、お前さんはお師匠さんを知つてるか」「是れは鈍念さん、阿呆らしい。私のようなものでもお師匠さんは存じて居ります」「エツ、知つてる。夫れでは何処へお越しになられた」「さア、何処へ御越しになつたか知りません」「でも今知つてると云うたじゃないか」「へエ、無論存じて居りますとも。憚りながら私も大徳寺の寺男でございます。大徳寺の一休禪師さんと云えば今では日本国中で知らぬものも無い名僧智識の方でございます。夫れがお寺に斯うして居る私しが知らん筈はありますものか」「オイ、そんなことを聞て居るのじゃ無い。今日お師匠さんは何処へお越しになられたと云うのじゃ」「エツ、今日……今日は何処へもお出まじやございますまい。お出まじの時には私しがお伴をすることに極つて居るのでございますから。多分お居間でございませう」「処が御居間にも本堂にも御庭にも御見えにならぬからお前さんに聞て居るのじゃ」「イヤ、私しは一向存じません」

寺男の言葉にいよ、訝かしく思つた鈍念は夫れでは此事を兎も角兄弟子の道意に伝え

より外はあるまい」「ハッ、それでは北風が吹けば南へ、南風が吹けば北へまいりますか」「オ、勿論のこと、今は乾の風だから先ず近くは都路、遠くは伊勢参宮かな」「へ、ン、それで若し伊勢参宮を済まして尚も乾の風が吹きますれば如何ようなされます。聞き及びますに伊勢様から巽の方向は海辺とやら申しますが」「ハ、ハ、ハ、ハ、其時は海に飛び込むより仕方はあるまい」

冗談半分でブラ／＼と都の三条通りを通りかゝり、是れから東へ向おうとする途中、三条大橋の東詰に何事か大層な人が群つて居る。禪師は橋の上を歩みながらフト是れに目を付けられ「道意、何んだか大層人群りだが何んだらう。一応見とゞけてまいれ」「畏こまりました」

道意はスタ／＼走つていったが聴て引ツ返して「お師匠さん、ツマラぬことでございます」「ホ、……、何んじや」「外でもございませんが橋の降りつめに紅葉屋と申す煎餅屋がございます」「フム／＼、如何にもある。中々大きな煎餅屋じや。それが何うした」「ハッ、其煎餅屋の主人と家内が何事からか存じませんが夫婦喧嘩を初めましたので、近所の人々が仲裁を致して居りますが両人とも焦氣となつて中々聞きません様子でございます。

は京都だけに口先では喧いをして居るけれども一向両方から手を下すこともようせぬ。と夫れを近所の人であらう二三人の男は「マアく」で両方へ別けて居る、側には其家の職人が是れも四五人マゴくして居るばかりで何方が何方とも定めかねて居る様子。

が夫婦の者は挨拶をされ、ばされるほど尚更ら猛り立って居るばかり。すると表では此の様を見て居る弥次馬連中はワアく云うて居る中にも「オイ何方も負けるな、シツカリく」なぞと茶化すものもある。

禪師は此の様を見てニコく笑いながら物をも云わずツカくと店先きへ上りこんだ。が夫婦の者は夫れに氣づく様子も無い。双方から相変らず負けず劣らず罵しり合うて居る。禪師は暫し是れを聞いて居られて、俄かに何思われたか店先きに並べてある煎餅の箱の蓋を開き、表の方に向つて「さア施行じやく誰れでもやるから拾えく」と中の煎餅を両手で摺んでは表の方へバラくつと投げ出し、其箱が空になると次ぎの箱、夫れも無くなる。と又た次ぎの箱と云う風に見るまに五箱ばかりの煎餅を撒き出したから表は忽ち大混

乱。

最初の内こそ「モシ、此の煎餅は拾つてもよいでしょうか」「さア、折角撒いてくれる

のでございませうによつて拾ひましようよ」「そうでしょうかな」「此んなものを拾わぬのは勿体のうございませう」「成程、では拾ひましよう。喧嘩よりも此のほうが結構ですな」「そうですく、喧嘩も面白いが此のほうが結構」なぞと拾つて居つたが、遂には「モシ、此処へも投つて下さい」「私しのほうへ……」「イヤ此処じゃく」と群つた人々は餅撒の餅でも拾うような気でワーツくと騒ぎ出したから、今までは焦気となつて居つた夫婦のものもフツと気がついた。

見ると何時の間に来たか、一人の坊さんが衣の袖をかゝげて一生懸命店先の煎餅を大道へ撒いて居るので驚いて喧嘩どころでは無い。今までの敵同志は一つになつて禅師の後から引ツ捕まえた。「モシ、無ツ、無茶をして貰つては困ります。是れは私し方の商売の品でございませう」「貴方は一体何処の坊さんか知りまへんが、誰れに答えて夫人な無茶なことをなさいませう」

夫婦のものは禅師と云うことを気がつかぬから、両方から衣の袖を掴んで大変な権幕。罷り違えば役人の手に渡しかねん有様だったが、禅師は一向平気なもの。「ハ、ハ、ハ、それで夫婦喧嘩は何うなりました」「ナニツ……」「治まつたかな、夫れなれば結構。ま

解説

加来耕三

(歴史家・作家)

『立川文庫』第一号

『立川文庫』の創刊は、明治四十四年（一九一一）五月とされている。創刊第一冊目に選ばれた、『諸國漫遊 一休禪師』の奥付に、同月十日発行とあるからだ。

ところがこの文庫シリーズ、奥付はまことにいい加減で、巻頭に刷り込んだ講述者と、奥付が違うものも少なくなく、重版した場合、初版発行年月を記していないものすらあった。版を重ねてから出てくる初版も、前のものを追いついたものさえ見受けられる。

当初の著述者は、加藤玉秀こと講談師・三代目（生前は二代目を名乗る）玉田玉秀齋であった。

東京で出版され、好評だった『袖珍文庫』から着想して、小型本として企画したものの、玉秀が大阪の版元に持ち込んでも軒並みに断られ、最後に立川文明堂に日参して、よ

うやく実現の運びとなった。

実はこの『立川文庫』、それ以前に講談小説として発行されたものを、改めて刊行したもののようだ。ラインナップは知れているのだが、残念なことにその原形になったと思われるシリーズが、いまだ発見されていない。

ただ、『立川文庫』に受け継がれた特徴は、そのラインナップから容易に推測することができた。『一休禅師』がそうであるように、世の権力に反抗して、これをやっつけたり、揶揄したりする人物が多くを占めた。

併せて、強大な力へ単身で立ち向かう姿勢も、共通項にあげられよう。

『諸国漫遊もの』も、多くの作品に見られる共通点といえる。意外なのは、講談の定連じょうれんともいうべき、人情噺がなく、色気もない。俠客や義賊も登場しなかった。この特徴の中こそ、本シリーズ空前絶後の成功の鍵があつたのかもしれない。

ちなみに、冒頭に「諸国漫遊」と冠した一休のタイトルを述べたが、本書に収められた『一休禅師頓智奇談』は『立川文庫』第四十二編として、世に出されたものであつた。

第一冊目の『諸国漫遊 一休禅師』とは内容がまったく異なっている。

一休禪師頓智奇談 [立川文庫セレクション]

2019年2月10日 初版第1刷印刷

2019年2月20日 初版第1刷発行

著 者 野花散人

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1800-9 2019 Nobana Sanjin, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。